# 1953年5月明神礁の志賀丸による観察*

星　　爲　　藏

昭和28(1953)年5月3日，志賀丸は，鳥島測候所補給の途次，明神礁附近を通過し，その東側の一面を望見する機会を得たので，当時の状況について報告する．

本船は，5月3日13時，八丈島八重根港を出発して，コースをS10°Eにとり鳥島に向った，$17^h40^m$ごろ．右舷40°前方の水平線上に小白煙を認めた．最初は噴煙

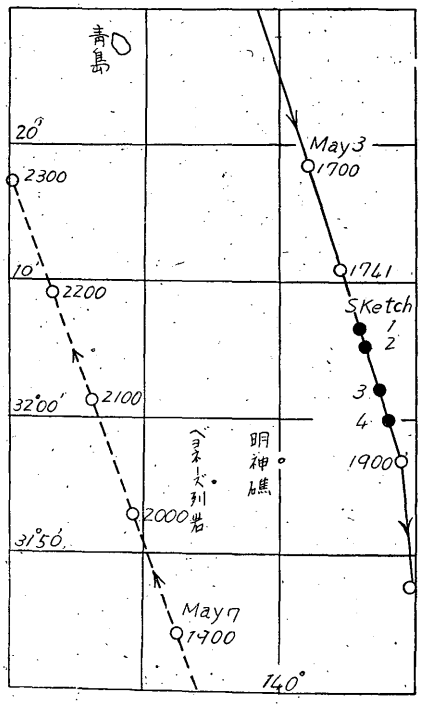
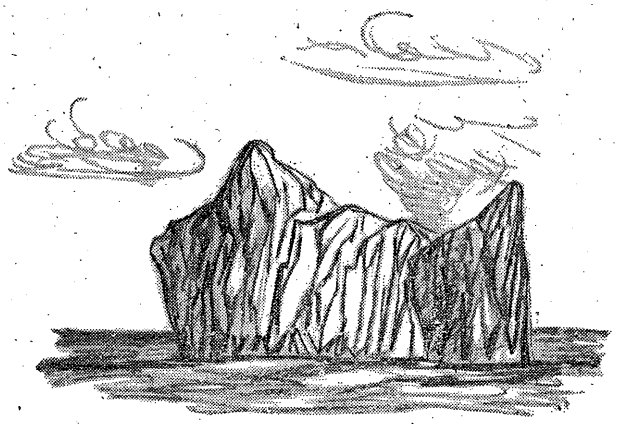
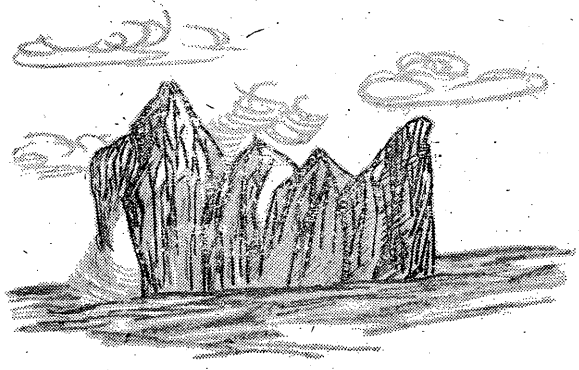



Fig. 1



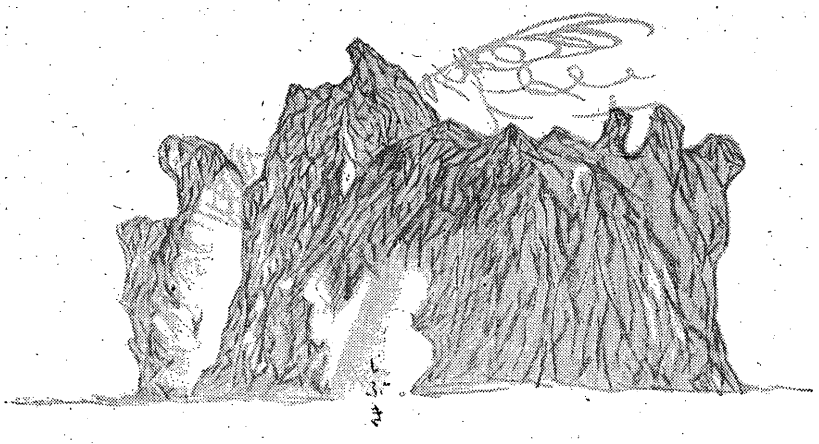
Sketch 1.　$18^h00^m$～$05^m$



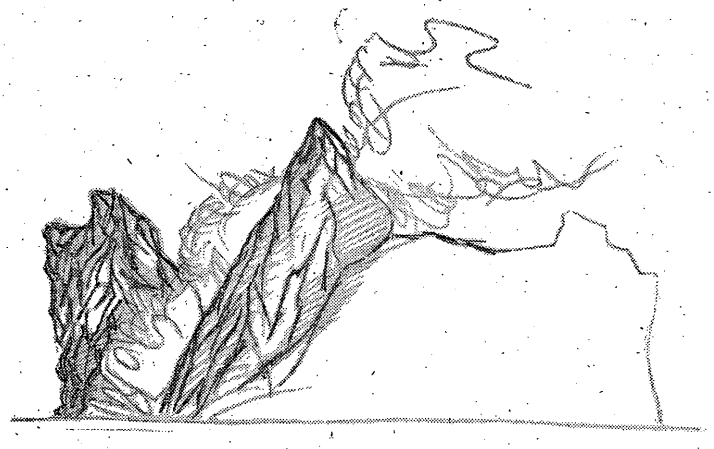
Sketch 2.　$18^h10^m$～$15^m$

かと思ったが，形が定常的に変化がないから，爆発による噴煙ではないものと判断した．$18^h00^m$ごろから，薄暮ながら，双眼鏡によって島の外観が明りように観取された(Sketch 1)．$18^h10^m$ごろから，島の左端に近い所に，滝かと思われる白色の部分があるのを認めた(Sketch 2)．$18^h50^m$ごろ，もっとも島に接近し，船との距離は約9浬の位置に達した．ここにおいて，滝のように見えた白色部分は，噴火口かと思われる岩の割れ目から立登る噴気が白雲となって，谷に沿うて風下にたなび

* T. Hoshi; Observation of Myojin Reef aboard Weather Ship, Shiga-maru. (Received May31, 1953)



Sketch 3.　$18^h30^m$～$35^m$



Sketch 4.　$18^h40^m$～$45^m$

いているものであることがわかった（Sketch 3,4）．$19^h00^m$ 以後はよいやみが迫るとともに，すみやかに視力外に消え去った．スケッチを行った位置と明神礁との関係位置を Fig. 1 に示す（図中，点線で示したコースは帰還経路であるが，夜間のために，状況は不明であった）．

明神礁の大いさについては，東側の一面だけからの観測であるから，正確を期することは困難であるが，六分儀により測定した結果によれば，高さは海面上 50m，最高部は 70m，測定の誤差は ± 5m と見積られる．水平方向の広がりについて，うんぬんすることはできないが，最広部 250m，最狭部 150m くらいと思われる．形状は NNE から SSW の方向に細長い コニカル・セクション図形であろうか？ 噴気孔は，島の南端に近い大きな割れ目で，海水に浸されているもののようである．本船が北から接近，南に離隔するまでに航行した，明神礁を隔たること およそ 10 浬圏外の海域では，変色，浮游物，水温の特別な異常は認められなかった．